

童謡はもつと「詩」を！

少年詩はもつと子どもへ！

楠木しげお

受賞そして大同団結

二〇〇八年の出来事として、間中ケイ子さんが詩集『猫町五十四番地』（2007 たらんく）によって、第十二回三越左千夫少年詩賞並びに第四十八回日本児童文学者協会賞を受賞した。詩集での協会賞受賞は一九九九年の桜井信夫氏（少年長編叙事詩『ハテルマ シキナ』以降九年ぶりのこと。少年詩の詩人たちを励ます、嬉しい快挙である。もう一つの出来事は、畑島喜久生氏の呼びかけによる、「現代少年詩の会」の結成である。童謡・少年詩の詩人たちを糾合しようという試みである。ここに属していれば、少年詩（童謡も）の世界のことがよくわかる。作品も発表

できる。詩誌「少年詩の学校」（三月創刊 たらんく）は、作品もさることながら、毎号評論が充実している。菊永謙氏（はたちよしこさんも）の熱意によるものである。

新しさと良さ

尾上尚子さんが「流れとしては、新しいものは特に感じないんですけど。」（「少年詩の学校？」）と言っているが、私には個々の詩集にも「新しい」と思える少年詩・童謡の作品は見当たらなかった。

短歌の世界で新しいといえば、俵万智（昭和三十七年十一月生）の後、今は穂村弘（昭和三十七年五月生）である。「サバンナの象のうんこよ聞いてくれだるいせつないわいさみしい」が代表作だが、私には良さが分からなかった。だが、近年の「塗り分けた蛍光ペンのカタツムリを各国首脳のおでこにつける」「リアモーターカーの飛び込み第一号狙ってその朝までは生きろ」などは、私にも面白いと思える。

しかし、子どもが対象で商品化される児童文学となると、こんな突拍子もないものは出にくいであろう。

ただ、「新鮮な」感じというのは有り得る。鋭敏な感性による「詩」の発見、詩的雰囲気醸成である。感性の輝きといえば、「いとゆうこ」であろう。ただ、今のいうはその輝きに頼り過ぎていて嫌いだ。もう少し落ち